

ハイウェイ墓場

志津

Written by SHIZU

LIMBO BY THE HIGHWAY

Ignorance, regret and loneliness...The deads couldn't help but hold their various emotions, and the sky is wide and high. There was a girl who attacked by some unknown guy, and Hayasaka tried to help her. Hayasaka chased the guy but died unfortunately because by the car crush. Hayasaka was buried the cemetery near by Tohoku Expressway, but the consciousness is stuck on the gravestone. No one knows why. This is a story of the lost souls.

01

うわ、線香くさ——嗅覚によつて覚醒をうながされた意識の視界を占めたのは、寒々しい曇天の下、外柵の内側で均等に並ぶ灰色の石だった。刹那、そこからフレームアウトしていく黒い影を追う。喪服を着た男女が三名、薄く溶け残った雪を避けるように進んでいく。

そのうちのひとり、白髪混じりの男が自分の上司だと意識が気づく。遠ざかっていく背中に目を凝らせば、隣には疎遠になっていた叔父と叔母。記憶にある姿より横顔に刻まれた皺が深く、叔母は真つ白なハンカチで口元を覆いながら、何度も上司に頭を下げている。

話しかけようにも、なんと呼びかけたらいいか。声をかけること自体躊躇する。親戚と上司が墓地に一緒にいるシチュエーションなんて、それ自体が答えのようなものだ。しかし

それを認めてしまえば、嫌でも自分が置かれた状況と向き合わなければならない。目覚めかけている意識が夢見心地であがいていると、

『あのー、まだ寝てますか』

『……………起きました』

知らない声に対して、いつもどおりのくたびれた声。意識は自分がまだ会話できる状態であることを知る。

『もしかして、起こしてしまいましたかね』

『いや、大丈夫です』

なかが大丈夫なんだ。反射的に己の発言に疑問を呈しながら、視線を声がするほうに向けて。意識を容赦なく現実へと引きずり出す男の声は、左隣にある墓石が発信源だった。

人の姿はない。花崗岩が角形に切り出された石材が鎮座しているだけだ。それでも、自分に話しかけてきた男がそこにいる。ここではそういうことになっている——意識の中で蓄積されてきた、例えるならば常識という情報として刷りこまれた前提の元、現在の状況を自然と受け入れていた。死んだからといって、元々適性のない人間に幽霊——もしくは魂、或いは残留思念といったもの——が見えるようになるわけではなかった。

『挨拶もせずに失礼しました。庄しょうじ子といます』

『……………早坂です』

『早坂さん。あれ、さっきのご夫婦は「阿部さん」って呼ばれてましたけど』

『母方の親戚なので』

『ああ、なるほど』

まさか生前の姿も知らない人間の墓と会話するとは。庄子と名乗る男に気を取られているうちに、意識の遺族たちはいなくなっていた。

数十メートル離れた山門の目の前にある駐車場からエンジン音。車種が古いのか音がやけに響く。その音が遠ざかると、続けて新たなエンジン音を鳴り響かせながら、もう一台の車が控えめに走り去っていく。

仕方なく、意識は視線を正面に戻す。雪解け水混じりの砂利道より手前には、雪よりも白い輪菊が左右一対の花立てはなたてに生けられていて、そのあいだに配置された香炉からは、線香の煙が細く長く昇っていく。そんな光景が目の前で繰り広げられている現実を直視してようやく、早坂望の意識は自分の死を自覚した。

早坂には周囲の景色に見覚えがあった。永川寺えいせん——東北自動車道下り、岩手方面へ向かう途中のインターで降りて五分程度の場所にある。曹洞宗の寺院のひとつで、昭和四〇年代後期に関東から東北へと進出してきた高速道路よりも歴史が古い。東北自動車道の開通により永川寺は寺院特有の静寂を失ったが、時代の流れには逆らえなかった。

早坂は両親との死別が早かった。九歳で父親を、三一歳で母親を亡くし、遺骨を父方の祖父母や曾祖父母たちと同じ墓に埋葬した。永川寺は早川家の菩提寺ほだいじでもあった。

『もし自分が死んだら、両親と同じ墓に入れて欲しい』と葬儀の最中叔母に頼んでいたのが、まさか二年後に実現してしまったとは。『親に先立つは不孝』は回避したものの、享年三三歳は流石に早すぎたと早坂は思う。けれども、隣の墓の男と会話できるのであれば、もしかして——早坂の淡い期待は、同じ墓からの無言の反応によって虚しく打ち砕かれた。

『ちよつといいすか』

『……ハイ』

感傷に浸る暇も与えない庄子の問いかけに、早坂は低く応える。

『ひとまず、ワタシたちはもう死んでいる……つてのは大丈夫ですかね』

『はあ。まあ、そうとしか言いようがないでしょうね』

『よかった。人によつては理解していなかったり、受け入れられなくて否定しまくるらしいんで』まるで新人研修のような調子で庄子は続ける。『幽霊だとか魂だとか、その辺はわからないのでテキストにお願いします。あと、ワタシたちはそれぞれのお墓から動けないんですけど、それ以外は生きていたときとあんま変わらないっほいです。飯食いたいかトイレ行きたいとか、そういう欲求がないくらいで』

庄子に言われて初めて、早坂もそれを自覚した。人間の三大欲求とは異なるが、墓で目覚

めてから煙草のことを忘れていたのだ。そういえばそんなものもあつたな程度で、寝起きの一服の有無で一日が決まるなどと考えていた日々には懐かしさすら覚える。死んで初めて禁煙に成功した。口が寂しいという感覚が削ぎ落とされたかのようにだった。

しかし、そんな感動は次から次へと重ねられる言葉ノイズによつて徐々に有り難みが失われていく。ひとまずですね、今日話してくれたことはデータとしてまとめ、あとで社内サーバーの共有ファイルにでも突っ込んでおいてください。と言いたくなるほど煩雑でまごまごとした情報が、庄子から早坂へとパスされていく。

早坂は自分なりに内容を咀嚼する。

私たちはすでに火葬も済み肉体を失つた存在だが、生前の記憶や人格が残っており、しかしそれもやがて風化していく。記憶が少しずつ消え、感覚が鈍くなり、意識が途切れる時間が増える。私たちは生前より持ちこんだものを手放して「純化」しきつたとき、ようやくこの世から旅立つことができる——そう結論づけた。根本的な疑問を解決する術がないことも悟つた。そういうものなのだなと割り切りが早くなっているのも、自分が死んだ人間である証拠なのかもしれない、とも。

庄子曰く、彼が伝え聞いた一連の情報も、彼がこの場にて覚醒した際に別のヒトから教わつたのだという。そのヒトは翌日から声をかけても返事がなく、おそらくもうここにはいない。最期の仕事を終えたからいなくなったのだと語つた。

墓場のシステムは口伝にて共有シェアされる。元号が変わり、令和になっても原始的な伝言ゲームが生き残っていることに、早坂は音もなく笑う。

『さつきから普通に話してますけど、住職さんにこの会話は聞かれたりしないんですか』

『ないっほいです。毎日見かけているので、そのたびに話しかけたり大声で歌ってみたりしましたけど、全部スルーされました』

『住職なのに聞こえないのか……』

『ほんとですよ。住職なのに』

僧侶に靈感があるとは限らないらしい。そもそも、自分たちを霊と定義していいのかもわからないなど早坂は独りごちた。とにかく、しばらくここでぼんやりしていくしかない。今後の方針が決まった。

ここで、早坂に新たな疑問が生じる。気は進まないが今すぐ訊くしかない。早坂は庄子の名前を呼び、

『すみません、自分で確認できないんでお訊きたいんですが、私の歿年ぼつ月日って、庄子さんから見えますかね』

『歿年ぼつ月日……死んじゃった日ってことですか』

『そうです』

『ちよっと待ってくださいね……あつ、ありました。令和二年、二月一三日ですね』

『二月……』

『戒名ってやつもありますよ。読み方わからないけど』

通常どおりの手順であれば納骨は四十九日に行われるため、成仏せずに目覚めた今日は四月二日ということになる。令和二年は閏年なのも含めて早坂は計算した。

三月の第三週、春彼岸を迎える時期は、早坂も毎年両親の墓参りで永川寺に来ていた。山門にはシダレザクラが植えられているが、東北の気候では桜の開花と春彼岸は時期が合わず、代わりに途中で芽吹いている梅を見るのが恒例だった。近くに立ち寄って熱心に観察するのはなく、風景の一部として眺める程度だったが。

四月の上旬に永川寺を訪れる機会はほとんどなかったが、この時期でも桜はまだ咲いていないことを死後に知った。

『そういえば、早坂さんってなんで死んじゃったんですか』

ワタシは交通事故でした。庄子は世間話の調子で問いかける。早坂は間を置き、

『多分、死因は交通事故です。トラックに跳ねられて、そのあと病院で』

『うわっ、キツイですね。手術、うまくいかなかったんですか』

『あー……あんま覚えてないです』

嘘をついた。正確には半分は真実で、早坂の記憶はトラックに跳ねられた瞬間から曖昧になっていく。担送車ストレッチャーに乗せられ白い天井が流れていく中、何度も名前を呼びかけられ。自

分が口で、もしくは瞬きで返事をしたのかどうかも怪しい。

全身が発火しているかのような熱の底で疼く痛み。心電図モニターのアラーム音が、けたたましく鳴り響く処置室。医者や看護師の緊張を全身に浴びながら、ことりと意識が落ちた。それが麻酔による一時的な昏睡なのか、心肺停止によるものなのかは、もはや早坂本人でも知りようがない。どちらにしる早坂にとって、最期の記憶はすでに優先順位の低い情報となっていた。

02

金色の瞳と目が合ったような気がする。猫は幽霊とか見えるのかな。思考を深めてみても必要な情報を見つけれず、早坂は引き続き傍観を決めこむ。

早坂の視界の中心で黒猫が座っている。首輪を着けていないその猫は野良らしく、痩せ型で毛並みに艶がない。けれど眼だけはやけに鋭く早坂の墓に向けている。猫に関心がない早坂にとって、お世辞にもかわいいとは言えない風貌だった。それでも黒猫は、退屈な日々の慰みとして一役買っている。

やがて黒猫が視線をそらし、その場に寝転がり背中を砂利に擦りつけ始める。その光景は、

早坂にある写真を思い出させた。それらはモノクロの写真で、異国の墓地にて墓参りしている女性の後ろに犬がいた。座っている写真、立っている写真、そして女性が立ち去ったあと、その場に寝転んでいる写真だ。

その犬はなにを思っているのか、その場に寝転んだのだろうか。邪魔者がいなくなって羽を伸ばしているのか、まだそこにいる飼い主、もしくは近しいヒトとこっそり戯れているのか、それとも単純に背中がかゆかったのか。そんな疑問を抱いたのだ。

早坂は眼前の猫を通して記憶の一端を遡っていると、その写真を撮った人物の名前が気になり始めた。外国人だったのは覚えている。モノクロの写真集を本屋で見かけ立ち読みして、その場で全部見るよりはゆっくり見たかったから購入したもの、結局自宅で一度見たきりだった――。

『ああ、あれだ』

エリオット・アーウィットだ。

『あれってなんですか』

『……いや、独りごとです』

隣人も暇を持て余しているのか、早坂の独言を耳にすると高確率で拾う。死んでもなお新たな人間関係、墓場コミュニティが形成されるとは予想外だった。

集団生活において、意図的に他者を無視するということができない早坂は、庄子の問いか

けには生前のように律儀に答えてしまう。ゆえに余計なストレスを生み出す。ささやかな達成感は、その場を去った猫と一緒にいなくなってしまった。

それ以降、早坂は猫が目の前で寝転んでみせても、犬の写真や写真家の名前を思い出すことはなかった。「あまりかわいくない」以外の印象が残らなかった。

四十九日を過ぎても現世に留まってしまった早坂は、常に自分の墓の中心に佇んでいる。自分が墓石の中心部分、棹石えさいしとなって土台に腰をかけているような錯覚に陥るが、実際は棹石を軸として浮遊している。

ジャンプしたときの、たった一秒にも満たない浮遊感が連続しているような、もしくは夢を見ているときの感覚に近い。夢の中で公園にいると認識していても、身体がどこにも触れていない。走ってみても走っている手応えが感じられない。あの体験が続いているようだ。早坂は思う。そして自分はもしかすると、死ぬと肉体が失うとされる、二一グラムという重さになっているのかもしれない。

早坂は天国や地獄を信じてはいなかったし、仏教やキリスト教といった宗教に傾倒もしていなかった。とはいえ、日常の延長と錯覚してしまいそうな、ファンタジックな状況も望んでいない。かつて両親も同じ経験をしたのかという疑問は残るが、声をかけても返事がないため確認することは叶わなかった。